生涯学習情報誌
Fons
- フォンズ -

No. 88　2020年4月27日発行
常陸太田市フォンズ・ネットワーク事務局
常陸太田市生涯学習センター内
〒313-0061 茨城県常陸太田市中城町3280番地
TEL:0294(72)8888 / FAX:0294(72)8880
Webサイト:https://hitachiota-fons.jp/

新・太田八景

塩原 慶子

古来、風光明媚な名所は「八景」と称され山水画などに描かれてきました。中国の「瀟湘八景（しょうしょうはっけい）」を倣った水戸八景は皆さんにもなじみが深いところでしょう。瀟湘は風光明媚というだけでなく、かつての王朝の中心地として栄え伝説や神話に彩られた地でした。瀟湘八景図を画いた宋迪（そうてき）も瀟湘のそのような歴史を踏まえていたと思われ、山水画の嚆矢（こうし）と言われています。

水戸八景は水戸藩徳川斉昭が領内の景勝地として選び、そこには斉昭自筆の隷書の銘を刻んだ碑が置かれています。八景の設定において斉昭には景観を楽しむだけではなく、藩子弟の心身鍛錬のために、各碑を徒歩で巡らせる企図もあったといわれています。

常陸太田には水戸八景のうち「太田落雁」と「山寺晩鐘」の二つがあり、ここを訪れた古の人々が眺めたであろう景色を思いやるとき、このようにして選ばれた地が自然の織り成す美しさに際立っていた昔と比し、現代では文明が進むに反比例して、純粋に自然のみの美しさにふれられる場所がだんだん狭まれて行くように思えるのは私だけではないと思います。

常陸太田の風光明媚なおすすめポイントをフォンズで選ぼうという企画が立ち上がった時「新・太田八景」という言葉が提案されました。新しい八景は、文明がすすみ生活環境が激変したものの、現代ならではの景色としてあるものを選びたい。文明の進化に伴う人の生活環境の変化と、残されるべき自然とのせめぎあいがある、今ならではの新しい八景を選んでみました。皆さんはどう思われるでしょうか？

写真：総合福祉会館（稲木町）

フォンズとは…ラテン語で泉の意味です。とぎれることなく新鮮な情報がお届けできるようにと名付けられました。

水戸八景について

天保四年（一八三三）斉昭公が水戸藩第九代藩主になって間もない頃、領内を巡視し景勝地八つを選定し、八景を設けるにあたっては〝中国の瀟湘八景（湖南省）〟を模して選んだといわれています。

八景の呼び名は中国の揚子江中流の洞庭湖の瀟湖・湘湖という景色の良い湖があり、詩に謳われた八か所の景色を、北宋時代（九七九～一一二七）の文人画家宋迪（そうてき）が撰したといわれています。

斉昭公は、水戸藩内の子弟に八景巡りを勧め、自然観賞と体力の向上を目的としたといわれています。道のりは二十里（約八十キロ）あり、それを一日で巡ったり、数か所を目標にして踏破したようです。八景の中で、常陸太田に二か所選んだ理由は、水戸徳川家の墓所が瑞龍山にあることと光圀公隠棲の西山荘があったためと伝えられています。

水戸八景地図

村松晴嵐（東海村村松）3

遥望村松晴嵐後
（遥かに望む村松晴嵐の後）

青柳夜雨（水戸市青柳町）4

雨夜更遊青柳頭
（雨夜更に遊ぶ青柳の頭）

仙湖暮雪（水戸市常盤町）5

雪時賞賞仙湖景
（雪時賞て賞す仙湖の景）

水門帰帆（ひたちなか市和田町）6

水門帰帆映高楼
（水門の帰帆高楼に映ず）

巌船夕照（大洗町祝町）7

霞光爛漫巌船夕
（霞光爛漫巌船の夕べ）

広浦秋月（茨城町下石崎）8

月色玲瓏広浦秋
（月色玲瓏たり広浦の秋）

太田落雁（常陸太田市栄町）❶

太田落雁渡芳洲（太田の落雁芳洲を渡る）

太田落雁は、常陸太田市栄町東側崖の中腹、「観蔵井」の真上にあり、阿武隈の連山を背景とする眺望が美しい。名称は、かつて雁が刈田におりる様子を斉昭（烈公）が詠みこんだ和歌にちなむ。碑は高さ一・七メートル程の花崗岩で、中央部の大文字は烈公の書で、「太田落雁」の「太」の文字は中国の難読古典文字が用いられています。

さして行く
越路の雁の
超えかねて
太田の面に
しばしやすらふ　（斉昭撰）

太田落雁の碑
「太」の字が「尖」と記されています

山寺晩鐘（常陸太田市稲木町）❷

つくつくと
聞くにつけても
山寺の
霜夜の鐘の
音ぞ淋しき　（斉昭撰）

この地は旧久昌寺の三昧堂壇林（僧侶の学校）のあった所で、天和三年（一六八三）に水戸第二代藩主徳川光圀が壇林を開いてから天保一四年（一八四三）に廃されるまで、一六〇年間に亘って全国から学僧が集まりその盛時には数千人の学僧が修業に励んだと云われています。

当時周囲の寺々より打ち出す鐘の音を、松籟とともに聞き「山寺の晩鐘幽壑に響き」と詩に詠み「山寺晩鐘」と命名した。

山寺晩鐘の碑
「山」の字が「巡」と記されています

山寺晩鐘響幽壑（山寺の晩鐘幽壑に響き）

2、3ページ掲載の水墨画は、常陸太田市推奨品でもある「雪村うちわ」の坏三郎氏によるものです。

フォンズメンバーが選ぶ

新・太田八景

萩谷 浩司、塩原 慶子、原田 靜雄、
鴨志田 弘子、安嶋 隆、武藤 卓

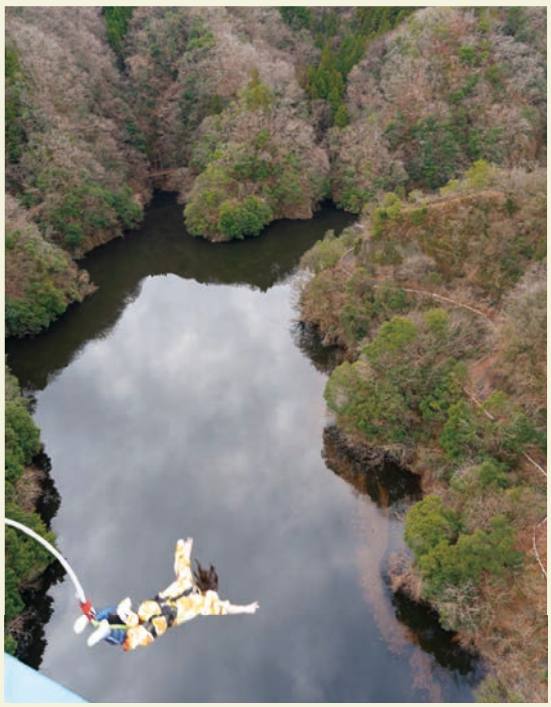
遥に望む高鈴真弓の稜
～幸久大橋（下河合町）

この風景は、フォンズでも何度も取り上げています。遠方に出かけての帰り道、額田から細い道を過ぎて視界が広がるとともに、幸久大橋の向こうに山並みと大理石の白い崖の景色が広がってくると、ふるさとに戻ってきたとホッとする。常陸太田にお住まいのほとんどの方にとって共通の思いを抱かせる景色であると思います。

人それぞれの心の思いを重ねられる、人それぞれのものがたりを重ねられる、風景にはそんな力があります。この幸久大橋からの景色は、常陸太田人の心象風景そのものといえるのではないでしょうか。

太田新成人青龍に飛ぶ
～バンジージャンプ（天下野町）

高所から見下ろして「絶景かな」と言いながら見得を切って、その先が飛び込みなんて！　成人式の実行委員がこのバンジーを飛べるようになってからというもの、以前は手が上がりにくかった実行委員に、進んで申し込む新成人が増えたそうです。高いところが苦手な者にとっては、なぜに怖い思いをしないとならないのかと思います。絶景に向かって飛び降りようとする人は、それぞれのきっかけを胸に抱いてトライすることが多いと聞きます。何かの大きな踏ん切りをつけるときに、そういえば「清水の舞台から飛び降りる」と言いますね。でも本当にそんな未来の景色を目にすることのできる時代がやってくるとは、古の人は思いも及ばなかったと思います。現代の絶景の極みです。



令和2年新成人バンジージャンプより

春爛漫桜色霞の夕べ
～十王坂郷土資料館分館（西二町）

絵：沼田久雪さん

鯨ヶ丘は、周辺に真弓千石と呼ばれた水田が広がる中にぽっこりと高台がつらなる地形で、その様子はまるで大海を悠然と泳ぐ鯨の背中のようだと、現在の名前が名付けられたと伝えられています。高台からの眺望や多くの坂道がある風景は、趣ある町並みとあいまってカメラマンや絵を描く人たちの興味を引きつけているようです。鯨ヶ丘の古い町並みをもっとも感じることができる塩横丁十字路。十王坂降り口には、郷土資料館分館かつては明治期から太田共同銀行（常陽銀行の前身のひとつ）として使われていた蔵造りの建物があり、その奥には西山公園と久昌寺が見える魅力的な場所です。市内在住の画家・沼田久雪さんは絵になるアングルでもあるし、歴史的な風景を感じる場所としてこの絵を震災前に描かれました。常陸太田市の文化遺産として残しておきたい風景です。

月光玲瓏光源の輪
～太田まつり（新宿町）

子どもたちにとって、太田まつりは夏の最大のイベントであったのは間違いありません。煌々とひかるライト、グランドいっぱいに並んだ夜店。思いっきり「おしゃらく」をしてグランドをぐるぐる回りながら夜店を冷やかして歩く楽しさは、夏特有のもの哀しさを含んだ高揚感に満ちています。

写真：平澤一彦さん

お祭りの多くは、神社仏閣の祭礼のそのいわれが結びついていますが「太田まつり」は市民の一体感醸成のためにつくられた「市民祭り」つまり、高度成長期に企画され、地域住民の楽しみにとどまらず、その地域のよさをアピールするために作られたイベントとしての祭りです。神社仏閣に起源をもつ祭り程歴史は古くはありませんが、それでも長年親しまれてきた夏の風物詩はなくなってしまったら心に穴が開いたようになってしまう大事な祭りに育ってきました。心の風景は、思い出とともに作られていきます。子どもたちの思い出とともにある太田まつり、他の事業の関係上、この二年間はグランドが使えず櫓も奥まったところに立って、なんとなく太田まつりっぽくないなぁと感じた方も多いのではないでしょうか。ことしこそグランドいっぱいに広がるライトと、グランドの芝生に寝っ転がって見上げる花火を楽しみたいですね。子どもたちの思い出が重なっていくことで、太田の心の風景もその深みを増すのです。

夜雨更にあそぶ源氏川のほとり
～源氏川の彼岸花（新宿町）

会の発足は二〇一八年ですが、星野さんが活動を始めたのは二〇〇七年ごろ。定年になり、自宅前の堤防を綺麗にしたいと一人で始めた活動でした。最初は菊を植えてみましたが管理が大変だったため元々自生していた彼岸花に変更。彼岸花は球根で分球するため広げやすく次第に堤防にも広がっていきました。地域の方達も星野さんの活動に参加してくれるようになり、現在は二十四名のメンバーで活動しています。

通常、堤防は国土交通省の管轄で草刈りを行いますが、彼岸花の保護のため新宿町の範囲は会のメンバーで草刈りを年に数回行っています。彼岸花の咲くタイミングは年によっても違うため咲いたら教えてほしい、とお願いされる方もいるそうです。「毎年彼岸花の写真をくださる方など、この活動がなければ会えなかった人達との交流やふれ合いがあって、新たな人生のスタートを切ったようです。」と星野さん。これからも赤い花が新しい常陸太田の秋を彩っていってくれることでしょう。

写真：大畠敬一さん

「ここまでになるとは思ってなかった。やってよかった。」と笑うのは源氏川の彼岸花を保存する会の会長、星野良孝さん。九月下旬になると新宿町の源氏川堤防に数万本もの彼岸花が咲き、その様子はまるで赤い絨毯のよう。毎年九月には鑑賞会を行い、昨年も市内外から多くの方が真っ赤に染まった堤防を眺めに訪れました。

山合古老玄蕎麦を積む
～金砂郷秋そば（赤土町）

浅川上流、西金砂山のふもとに位置する赤土町。緑豊かな山並みに囲まれたその土地にはそば畑が広がり、九月になると白い花が咲き斜面全体が真っ白におおわれます。「常陸秋そば」発祥の地で見られるこの風景はどのように守られてきたのでしょうか。

平成二十年から活動する「常陸秋そばの郷まもりたい」は赤土町会の方々が中心となって結成されました。赤土町で栽培されている常陸秋そばは主に種とするための種そばが中心です。そばは他の品種と交雑してしまう作物のため、種そばが虫の受粉により他の品種と交雑しないように赤土町の中で注意を払いながら栽培されているのです。

活動としては種まきや栽培管理、刈り取りなど会員の皆さんで行うこともあれば、地域の方や学生ボランティアの方の力を借りることもあります。会員の名田部治さんは、「安定栽培のために、土壌改良や堆肥の投入、緑肥作物の栽培など適正な肥培管理をして高品質の常陸秋そばを栽培していきたい。」とおっしゃっていました。白く可憐なそばの花の咲く景色を守り、次の世代へと継ぐ人達がこの地域で活動を続けています。

手つかずの自然ではなく、人の手あってこその自然の美です。

湿原を守る岡見の景　～岡見湿原（里川町）

岡見湿原は福島県と接する里川町の標高七百二十メートルの山地にあります。湿原を中心とする付近一帯は落葉樹林やスギ植林が広がり、林の間を流れる小川や湿原など変化に富んだ自然環境を保っています。

春の湿原や川沿いにはカタクリ、ニリンソウ、バイケイソウ、ハルトラノオ、スミレ類など、この季節だけに見られる植物（春咲き植物）が群生して花を咲かせます。夏はミズナラ、リョウブ、カエデ類などの落葉樹林の緑が美しく、森林浴を楽しむことができます。秋にはイタヤカエデ、ハウチワカエデ、ヒトツバカエデなどのカエデ類、イヌブナ、ブナ、ミズナラなどからなる落葉樹林の紅葉が絶好の撮影スポットです。さらに冬の雪景色の中の散策は自然の厳しさを実感できます。このように岡見湿原は自然の恵みを肌で感じ取ることができる場所です。

近くの三鈷室山（標高八百七十メートル）は市内で最も高い山で、頂上から北は安達太良連峰、南は筑波山などが一望できます。三百六十度の展望は素晴らしく、時には富士山も見ることができます。

このように変化に富んだ岡見湿原を含む周辺の自然は次世代に残したい自然遺産のひとつです。

フォンズメンバーが選ぶ　新・太田八景

❶ 帆布の白色水鏡に映ず～総合福祉会館（稲木町）表紙
❷ 遥に望む高鈴真弓の稜～幸久大橋（下河合町）
❸ 太田新成人青龍に飛ぶ～バンジージャンプ（天下野町）
❹ 春爛漫桜色霞の夕べ～十王坂郷土資料館分館（西二町）
❺ 月光玲瓏光源の輪～太田まつり（新宿町）
❻ 夜雨更にあそぶ源氏川のほとり～源氏川の彼岸花（新宿町）
❼ 山合古老玄蕎麦を積む～金砂郷秋そば（赤土町）
❽ 湿原を守る岡見の景～岡見湿原（里川町）

思い出の絵本

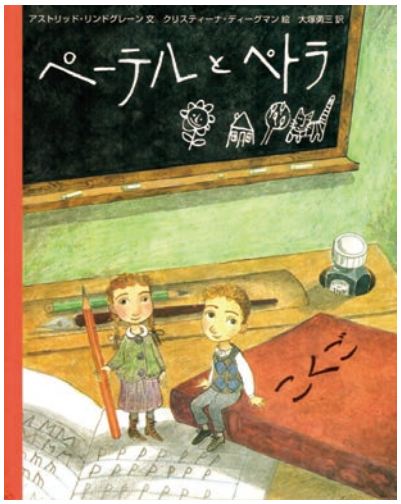
『ペーテルとペトラ』

武藤 道代（春友町）

私がこの本に出会ったのは、小学校の低学年の時です。読書の時間があまり好きではありませんでしたが、図書室にあったこの本の挿絵のかわいらしさに惹かれて手に取りました。

「わたしたち、この学校に入れてもらえますか？」小学校の一年生のあるクラスに小人の兄妹ペーテルとペトラが訪ねてきました。お話の始まりは、そんな不思議なことでした。この本を見つけてからは、読書の時間が楽しみになり、図書室に行くたびに何度も読み返したのを思い出します。突然現れた小人の兄妹に、最初は戸惑っていた先生や子ども達も、二人の頑張る姿に心を動かされていきます。教室には小さな机とイスが用意されました。楽しそうなクラスの様子にワクワクしました。一番の仲良しになったグンナルくんが公園の片隅にひっそりとある二人の家を見つけ、訪ねる場面や誰もいない夜のスケート場で二人が華麗に滑っている姿はとても美しい光景で、私が一番好きな場面です。冬休みが終わると二人は突然いなくなってしまうのですが、その後に手紙が届きます。最後は少し切なくなりますが、先生の優しさや子ども達の純粋な気持ちが伝わってきて、とても温かく澄んだ気持ちになります。

娘が小学生の頃に読んであげたところ、娘にとっても大のお気に入りになりました。娘も今は思春期真っ只中。感情的になりぶつかることも多々あります。そんな時にこの本を開くと、日々の忙しい生活の中で忘れがちな思いやりの心などを思い出すことができます。読んでいて優しい気持ちになれる本です。



文化の泉

天神ばやし保存会

［取材］黒羽 文男

天神ばやしの起源は古く今から約八百年前に遡ります。室町末期から安土桃山時代に常陸の国を支配していた佐竹氏の時代に城下で農兵を集める際や出陣の時に打ち鳴らされた太鼓が起源といわれています。戦乱が収まった江戸時代以降は、天神林村の小字ごとに演奏し農民の娯楽となり、村の鎮守である稲村神社の春祭りに余興として披露されていました。

昭和五十二年に文化遺産として継承保存してゆくために、「天神ばやし保存会」が発足しました。主な活動は、老人ホームや介護施設等の慰問、佐竹小学校児童や子供天神ばやしの指導、様々なイベントに参加しての天神ばやしの紹介です。

清水会長は「太鼓は見るのも演奏するのも楽しいものですが、力一杯叩くときに感じる爽快感は何にも代え難いものがあります。常に自らが楽しく演奏し、聴いた方に感動してもらえるようにという気持ちで叩いています。」と笑顔で語ってくれました。

人員構成／20名　活動日／毎月第1・第3土曜日
活動場所／天神林集落センター
活動費・年会費／5,000円
連絡先／会長：清水尚　0294-72-2031
常陸太田市教育委員会文化課　0294-72-3201

ほっとひといき

『ツマキチョウ ～春のお姫様～』

佐々木 泰弘

春になり、暖かくなると様々な昆虫が動き出します。その中で春にだけしか姿を見せない種類がいます。チョウの仲間では、ミヤマセセリ、コツバメ、ツマキチョウなどが知られており市内でも見ることができます。これらのチョウに出会うと春が来たなと一年の始まりを感じます。

その中でもツマキチョウは、華奢な可憐なチョウで春のお姫様といいたくなるようなチョウです。翅の先が黄色になっていることからツマキと名前が付いていますが、黄色い色がついているのはオスだけです。翅の裏側も複雑なコケ模様になっています。ただし、飛んでいるときには白くしか見えず、他のシロチョウの仲間でもあるモンシロチョウやスジグロシロチョウと見分けるのが少し難しいです。ツマキチョウは羽ばたきが早く、直線的に飛ぶので慣れれば見分けがつくでしょう。タンポポやナズナにもよく吸蜜にきますので、そっとそのすてきな姿をのぞいてみてください。

※お知らせ
「常陸太田の地名話」「Do!スポーツ」「ちょっとひといき」は、都合によりお休みいたします。次回をお楽しみにお待ちください。

※お詫び
第87号「日本盆栽協会」の紹介で、記事と異なる写真を掲載し、関係者各位にご迷惑をおかけいたしましたことをお詫びいたします。

新太田点描 23

枕石寺の西天上人

作家倉田百三の代表作の一つに挙げられる「出家とその弟子」は枕石寺がモデル舞台であることはよく知られている。

枕石寺は建暦二年（一二一二）当時の大門村に創建されたが、その後内田村に移り、さらに河合村へと場所替えをして現在に至っている。

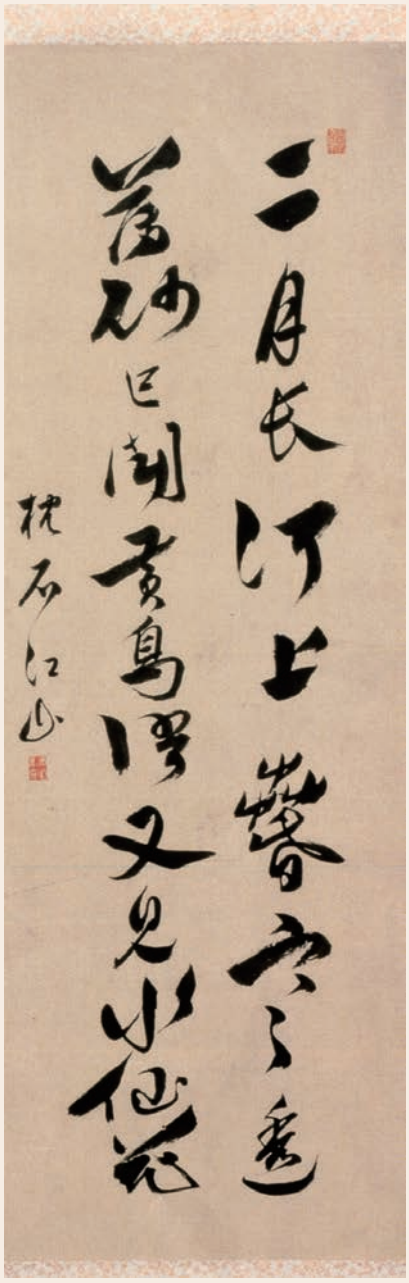
この間、歴代住職の不断の努力によって親鸞聖人二十四輩寺院の一つとして数多の真宗信者の心の拠り所になっていたことは容易に想像できる。

その住職の一人に二十二世西天上人がいる。上人は鹿島郡鳥巣の無量寿寺から枕石寺に入り、教義の布教ばかりでなく様々な活動をしている。

例えば、青蓮寺で長年病気療養をしていた豊後國（大分県）臼杵村の初衛門とその娘つゆとときとも関わりを持ち、父・娘三人が臼杵村への帰郷に際しては、周囲の人たちからの餞別を取り纏めたり送別の歌を送るなどしている。

ところで、西天上人は雅号を「枕石」「江山」と称し近在近郷に知られた能書家であったというが、遺墨は殆んど見当たらない。これは元々揮毫したものが少なかったのか、或いは時代の変遷とともに失われてしまったのであろうか定かではない。

つい最近になって「枕石」落款のある一幅の書軸を見ることが出来たので下に掲げて置く。



またついでながら枕石寺に関する出版物を二点ほど紹介しておこう。

一、木版一枚刷（仮題）枕石図と詠歌

この刷り物には枕石寺の寺宝の枕石が描かれ、紙中には親鸞聖人の苦行に思いを寄せた人々の歌・詩が詠み込まれている。紹介しよう。

高祖（親鸞聖人）

わひしさハ石を枕にかりねして
　あくるをまつは久しかりける
きく度に袖とさしほれ我たえの
　石を枕につもる白雪　　従如上人
雪をしとね石を枕の古しへを
　聞なはための弥陀の本願　　岩船尊老
傳えこし枕の石のことわりや
　世々にかかくる法の託言　　西山源公
聞道厳冬夜褥雪臥門前枕石今猶在何耐就安眠
　　釈恵雲
草鞋侵白雪片石枕寒風高□霊山道□然満日東
　　朝鮮国南秋月

一、『親鸞聖人枕石寺傳絵鈔（上・下）』二巻

これは親鸞聖人六百年忌の万延二年（一八六一）に「水戸大門山蔵版」として出版されたものであり、聖人と枕石寺の関わりを具（つぶさ）に物語っている。

何れにしても枕石寺を語る上では大いに参考になるものであろう。

（吉成英文）

（ひたちなか市　大山富彌氏所蔵）